

## 酒井良男先生と自然災害科学

伯野元彦

酒井先生は建築耐震が御専門で北海道に骨を埋められた、一方私は土木耐震で東京に永く居る。そのため、なかなかお会いすることもなく、お名前すら存じ上げなかった。

今から10数年前、私の勤務先の東大地震研究所の大沢胖先生から自然災害特別研究の連絡会議が仙台であるが、先生は都合が悪いので代理出席を頼まれました。その会議は通常の居眠りが出るような会議とは、大部空気が違うように私には思えた。というのは、会議の途中で議論が白熱し、と言うより怒鳴り合いという様相を呈し始めたからである。そのような会議に余り慣れて居なかった私は、アッケにとられていたが、今でも忘れないような強烈な印象を受けた。その時の口角泡を飛ばした二人の好敵手が、酒井良男先生と松沢勲先生であることは、後で知った。

その時にも既に酒井先生は自然災害グループの北海道地区部会長でいらっしゃったが、それから10年近く部会長として、自然災害の研究発展のため努力された。そして、北海道大学を停年退官された後も、北大構内の自然災害資料センターで災害資料の収集、整理に当たられたと聞く。まさに、自然災害科学の促進のため献身され戦死されたとしか思えない。先生が亡くなられてから二か月後好敵手、松沢勲先生も静かに息を引きとられた。

(はくのもとひこ：東京大学地震研究所所長、重点領域「自然災害と社会の防災力」研究代表者)

## 酒井先生のこと

佐武正雄

酒井先生とは、自然災害、とくに資料センターや資料解析の関係で、長いお付き合いをさせて頂いた。

会議の時、先生はお声も凜として大きく、いつもきちんと議論されないと気がすまないといった態度で発言されていた。

先生のかねてからのお考えは、資料センターは単に災害資料の収集・保管やサービスをするだけでなく、自然災害研究の中心として研究者が集まり、その地区の自然災害研究の核となるものでなければならない。突発する災害に速やかに対応して調査を行い、また多面多様な災害研究を総合して推進する場とならなければいけない、というものだった。

資料センターの予算は、先生のお考えとは逆に、十年で打切られたり、その後の復活接渉といったことで、北海道地区は最初のケースだったこともあり、ずい分御苦労されたと思う。私共の東北地区等は、いつも先生のなさった後を教えて頂き乍らついてゆくという形であった。しかし、

先生の長年の御苦勞の効いがある、資料センターの予算も、やっと安定した形で復活し、さらにデータベースを中心に発展する方向で進んでいることは、先生の御盡力の賜物と感謝申上げている次第である。

先生は、災害の研究成果の普及ということにも心を砕かれ、総合研究班で昭和57年に出版した「地震と災害」—研究成果普及版—は、編集作業を殆ど先生一人で意欲的に進められた。私はこの時、ライフラインの関係でお手伝いさせて頂いたが、先生はできるだけ分かり易く、よい写真を沢山のせようと努力された。その時集められたスライドが、北海道の資料センターに残る膨大な収集に発展したのだと思う。

こういう風に、先生は何事も、熱心に徹底してなさるお仕事振りで、私は、先生のそういう態度に引きつけられ、教えられることが多かった。

先生はお酒がお好きで、折にふれ誘って頂くと、風発する談論に花を咲かせ、いつも楽しませて頂いたものだった。

敬愛する酒井先生が亡くなられ、本当に淋しい思いに堪えません。先生の御冥福を心からお祈り申上げる次第です。

(さたけまさお：東北大学工学部教授)

## 酒井先生を偲んで

福 島 久 雄

昨年の秋、しばらく酒井先生にお目にかからなかったので、災害センターをお訪ねしてみようかと思っていたある朝突然のご訃報を新聞紙上で知った。平素ご丈夫なようにお見受けしたので俄かに信じられぬ気持ちであった。

酒井先生が災害科学の集りに顔を出されるようになったのはいつの頃かハッキリ思い出せない。ずい分昔のことである。先生と私との交際はこの集りを通じて始まり、遂に最後まで「災害科学」のご縁であった。

先生はいつもファイトに富んで居られた。いつの年だったか工学部の運動会でマラソンに挑戦され、トップの方ではなかったが中止されることなく完走、重い足を引きずりつつ笑顔でゴールインされた時の様子が今も思い出される。お年に似合わず頑健な心臓の持ち主と改めて印象に残った。

御息子が登山の事故で急逝されたことも強いショックであったと思う。しかし先生はやがて立ち直って一層お仕事に専念された。全国の他の地方に魁けて災害センターが北海道大学に出来たのも、先生のお力が大きかったことはここに更めて記すまでもなからう。

先生はその後もセンターの育成に渾身の力を揮って盡された。ご在任が長いので、屢、他の地